

越境的学習としての体育 —附属学校での挑戦的実践—

森 勇示

愛知教育大学保健体育講座

A Proposal on Cross-Boundary Learning in Physical Education -Aggressive Practice in the Affiliated schools-

Yuji MORI

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 問題と目的

教育改革の要請・教育課程の改訂に連動し、授業改善も求められる。そのための研究授業なども公開され協議され改革は伝播していくものと考えられる。だがそれは、所詮、我が国の教育課程、学校、教師のアイデアという枠組の中での出来事に過ぎない。このような枠組を越える革新的な改革はないものか。この問いに対して、附属学校で挑戦的に実践している越境的学習^{注1)}としての体育^{注2)}について報告する。

越境的学習はビジネスパーソンが、自らが所属する組織を自発的に越境し、職場内外に学びの場を求める学習である¹⁾。

この学習観は主として2つの理論に依拠する。1つはエンゲストロームの「活動理論」²⁾、もう1つはレイブとウェンガーの「状況論」³⁾である。「活動理論」は、人々の文化的・社会的活動の中に学習があるととらえ、職場や学校などの社会的活動を1つの学習システムと考えている。「状況論」は、徒弟制集団(産婆や仕立屋)の中の働く行為を1つの状況ととらえ、その営みへの関与の度合いが変化していく中に学習があると考えている。

2つの理論では、どちらも学習は個人的な営みでなく、集団内の相互作用によって生じるものという立場をとる。そして、このような集団を「実践共同体」⁴⁾⁵⁾と呼び、それは上記2つの理論を経て越境的学習にも適用されている。

上記理論の学習は、学校の授業のようにあらかじめ計画されたプログラムの遂行によって系統的な内容を習得することではない。したがって、越境的学習とその関連理論は学校の標準的な授業とは相容れない。ただし、従来から学校教育に越境が無かったわけではない。現場で学ぶ実習(教育実習や看護実習など)、校外学習(社会科見学や自然観察など)、地域人材の活

用(専門家による講習など)は学校・教室を越境し、現在でも行われている。しかし、このような越境は、あくまでも越境の片側(学生・児童生徒)が学習するものであり、境界をまたがる両者に学習を求めているわけではない。

これまで体育には、小学5年生と中学1年生による合同体育についての研究⁶⁾が報告されている。ただし、この研究は本稿で言う越境的学習の理論によるものではなく、小中学生が合同で行った体育授業の結果を態度測定によって調べたものにとどまる。しかも、その調査は越境というよりも小中学生の差異に注目している。他に、越境的学習を自覚し学校に導入した例には、山住の総合的な学習や家庭科の調理実習などの報告⁷⁾⁸⁾があるものの、その事例は少ない。

そこで、本稿では越境的学習の導入を自覚的に企図した附属学校体育科での実践を提案する。ただし単なる事例提案にならないように、まず越境的学習が依拠する2つの理論(「活動理論」「状況論」)の概観を示す。次いで、これら関連理論にもとづく越境的学習の特徴をふまえた附属学校での実践を提案する。そして、これをもとに体育の新たな可能性について展望する。以上が本稿の目的である。

2. 関連理論の特徴

2-1. 活動理論

エンゲストロームは、その著「拡張による学習」²⁾の中で学習を1つの「活動システム」ととらえている。これはヴィゴツキーらの「文化—歴史的活動理論」^{注3)}を源流とする。学びは、このシステム内の文化的・社会的な実践にあると考え、図1のような構造概念を提示している。

この構造では、「主体」は学習者になるが「対象」は単なる学習内容ではない。この構造での「対象」と

は「主体」が学習に向かう目的や動機を意味する。また、「道具」は人工的の媒介物を表すものであり、人工

る。

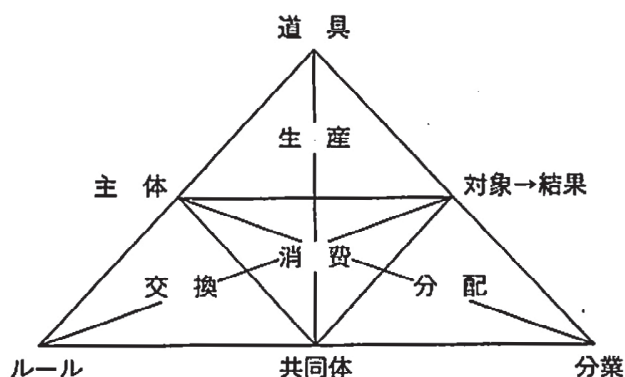


図1 人間の活動の構造
 (「拡張による学習」²⁾ p79 の図)

的なものすべてを含む。すなわち、物的な道具はもとより、記号や学習方法、教師の計画や指導も「道具」に含まれることになる。

これら「主体」「対象」「道具」(図の上部三角形)は個人的な範囲の活動(学習)にとどまる。これに加えて「活動理論」では「ルール」「共同体」「分業」の社会的な背景が含まれ、図の基底部を占める。この基底部の「共同体」に学校や学級がある。そこでの「ルール」は制度や規律、「分業」は級友の活動になる。

エンゲストロームは2つの相互作用する活動システムのモデルが学習を拡張すると考えている。それは図2に表される。

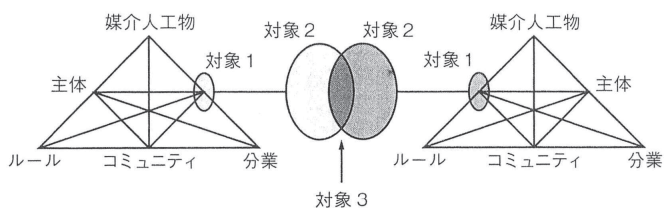


図2 第三世代活動理論のための「最少限二つの相互作用する活動システムのモデル」(山住「ネットワークング」⁹⁾)

図2の学習において、2つの「主体」が異なる状況に属しているなら、それはまさに越境的学習になる。それぞれの「主体」が双方の「対象1」「対象2」に向かう実践から創発された新たな「対象3」は学習が拡張されたことを意味する。

図2のような「主体」同士の結びつきは「ネットワークング(knotworking)」とも呼ばれる⁹⁾。これはネットワークングとの差異を強調する意味でのエンゲストロームの造語である。ネットワークが恒常的な関係の状態であるのに対して、ネットワークは実践の過程で結びつき(knot)ができたり、ほどけたりする。すなわち「実践共同体」には即興的な特徴があることにな

2-2, 状況論

「状況論」はレイブとウェンガーによって提唱され、徒弟制の営みを1つの状況とし、その状況に潜在する学習に注目した理論である。彼らの研究は産婆、仕立屋、操舵手、肉屋、「アルコホリック・アノニマス」^{注4)}の5つの徒弟制の調査に基づくものであり、学校教育は対象とされていない。

徒弟制では、新参者になることは状況への正統的な参加であり、新参者の参加は徒弟の中心にはないので周辺的である。このことから「状況論」の学習を「正統的周辺参加」¹⁰⁾(以下LPPと表す)という。

LPPでの学習は教師や教材がもたらすものではなく、状況の中の実践にあるとしている。そこで、このような状況を有する徒弟集団を「実践共同体」と言い、共同体における実践は社会的実践ということになる。また、徒弟の中で新参者が学習し古参者になっていくので、LPPでの学習はアイデンティティの形成¹¹⁾になると考えられている。以上のことから、LPPの特徴を一般的な学校の学習と対比させて考えると以下のようなになる。

- ・一般的に学校の学習の対象は教科書や教材中にあるが、LPPでは「実践共同体」の状況の中にある。
- ・学校の学習は授業における認知的活動が主になるが、LPPでは社会的実践になる。
- ・学校の学習の成果は習得になるが、LPPでは「実践共同体」の中でのアイデンティティの形成になる。

2-3, 越境的学習の特徴

越境的学習は社会人の自発的な研修として生成・発展してきたものである。石山は企業の人材育成における学習を多角的に検討し、越境的学習を5つに定義した¹²⁾。

- 定義1 広義の越境的学習の対象者は、「異なる状況をまたぐ人すべて」である
- 定義2 狭義の越境的学習の対象者は、「組織との関わりを有する働く人、働く意思のある人」である
- 定義3 越境的学習の境界とは、「自らが準拠している状況」と「その他の状況」との境を意味する
- 定義4 越境的学習の対象範囲は、越境者が境界を往還し、境界をつなぐ、一連のプロセス全体が該当する
- 定義5 越境的学習は、境界を往還しているという個人の認識が存在することで成立する

以上の定義から越境的学習には、「異なる複数の状況」や「境界の往還」という概念が含まれることが分かる。そして、この学習組織は「活動理論」「状況論」

を背景とする「実践共同体」と呼ばれる。この「実践共同体」は自発的・非公式的・即興的な集まり¹³⁾という特徴があり、そこに新たな人間関係形成の場が生じると考えられている。

では、単に人が集まっただけの集団に学習機能は生じるのだろうか。学習には共同体内で実践を仲介する者が必要であり、この仲介者は「ナレッジ・ブローカー」¹⁴⁾と呼ばれる。「実践共同体」のメンバーが多重成員性を有するがゆえに、実践の視点は拡散している。そこで「ナレッジ・ブローカー」は、このような視点の結合を果たす役割を担う。視点の結合は「ナレッジ・ブローカー」という共同体内のメンバーによるものであったり、ときに「境界オブジェクト」¹⁵⁾と呼ばれる物的・概念的共有物であったりする。

では、越境によって共同体内部で学習に至るには何が起こるのであろうか。香川は越境的な学びのプロセスについてまとめ、まず「文化的動揺」があり、それがやがて「異文化占有」により「第三の知」の創造が起こるものと考えている¹⁶⁾。これは特に意識する必要もなかった自分の文化（振る舞いや感覚）を改めて自覚し、やがて相手の文化を採り入れることで、「第三の知」が生じるというものである。このような「第三の知」は、エンゲストロームの「対象3」(図2を参照)と同義と考えられ、越境的学習の成果と言えよう。

2-4, 越境的学習の特徴まとめ

前項 2-1 から 2-3 の概要から越境的学習の特徴は以下のようにまとめられる。

- ・越境する組織は既定の組織とは限らずインフォーマルなものも含む「実践共同体」になる。
- ・学習とは系統的カリキュラムの習得ではなく「状況」の中の実践にあると考える。
- ・越境的学習の結果は「自文化の自覚」「異文化占有」「第三の知」などの「知の創出」に至る。

これら「実践共同体」「状況」「知の創出」が越境的学習の主要な特徴になる。

3, 附属学校での実践

本稿での附属学校の実践は、従来から行われている複式学級¹⁷⁾⁻¹⁹⁾や地域連携での越境とは違う。複式学級の目的は学級規模の維持にあり、そのカリキュラムが学年別である限り境界を越えない側面がある。また、地域連携に子どもと外部指導者が越境し双方が学ぶという趣旨はなく、外部指導者は本稿での「道具」(図1・2参照)になる。

以上のような違いを前提に、2つの実践に取り組んだ。1つは小学5年生と中学2年生による跳び箱の授業、もう1つは小学4年生と実業団選手によるゴール型(ハンドボール)の実践である。

3-1, 小学5年生と中学2年生による跳び箱の授業

この授業は、小中学生 70 名による跳び箱の学習である。この学習が越境的学習になるために次のようなプロセスをたどり授業を考えることとした。

まず、小中学生に差があることを考慮し、全員の参加を保障する授業を考えた。体育授業には恐怖心などから運動への参加を拒否する場合がある。そのため、全員参加を保障するには、誰もがトライできる場のセッティングが必要になる。本実践では次のような場を準備した。

- ・段数を変えた跳び箱 6 箇所
- ・ロールマット 4 箇所
- ・並列に並べた跳び箱 2 箇所
- ・ステージ上から回転する場 2 箇所

子どもたちは、この中から自由に選択して運動に取り組めるようになっている。(図3, 図4, 図5, 図6) 今回の実践(2018年6月)ではこのセッティングで全員が参加できた。



図3 跳び箱のセッティング



図4 ロールマット

次に、この授業において 70 人の子どもたちが「実践共同体」としての性格をもつためには、共有できる運動課題が必要だと考えた。しばしば見られる例に、開脚跳びなど1つの技に限定し全員がその技の習得を目指す授業がある。このような授業では達成度に差が生じ、劣等感をもつ子が参加に消極的になる。これを

防ぐために、本実践では技を1つに限定せずに「回転系」という括りの中で自分ができる跳び方でよいとい



図5 並列に並べた跳び箱



図7 台上前転, 前方倒立回転跳び, 首はね跳びが同時に見られる

最後に、この授業が「状況に埋め込まれた」学習になるために、子どもたちが実践を通じて気づいたことを発表し合う機会を設けた。(図8)



図6 ステージ上から回転する場



図8 気づいた動感について発表し合う

発表では主題を「速さの違い」とし、「自分の跳び方を速さを変えて跳んでみよう。」との条件を示し、この条件でしばらく実践した後、次のような質問をした。

速さの違う2種類の跳び方(回り方)で跳んでみた時、どんな違いを感じましたか？

これに対して以下のような回答があった。

(小学生)

- ・速いと着地がドンと強くなり、遅いと着地に余裕がもてた

- ・速いと回れるけど、遅くすると脚が上がらない
- ・速いと勢いで回るが、遅いと自分で回そうとする

(中学生)

- ・速いと脚の曲げ伸ばしが使える。遅いと使いづらい
- ・遅いと回りきらず横に倒れそうになる
- ・速いと手の力だけで回れるが、遅いと脚で回そうとする

これらの回答は自身が受けた動感を言語で表しているものである。本来、動感個人感覚として他者に共有されるものではない。だが、上記回答のうち「速

うことにした。あわせて、学習の目標を技の習熟とせず、子ども個々が動感(運動感覚)を発見することに焦点を当てた。

実践を通じて台上前転, 前方倒立回転跳び, 首はね跳びの3つの技が見られ, 自分に取り組む技を1箇所を繰り返す子もいれば, 異なる箇所で試しながら場所を移動して取り組む子もいた。(図7)

いと勢いで回るが、遅いと自分で回そうとする」と「速いと手の力だけで回れるが、遅いと脚で回そうとする」など類似するものがある。

発表を通じて自分の気づきと他者のそれが類似していると認められるなら、学習の視点は結合へと向かう。したがって、発表には「ナレッジ・ブローカー」を輩出する機能があり、この実践での共有概念「回転系」「動感」「速さの差異」などは1つの「境界オブジェクト」になると考えることができる。

3-2. 小学4年生と実業団選手とのゴール型(ハンドボール)の授業

この授業は小学4年生1クラス32人と日本ハンドボールリーグHC名古屋の選手4人によるゴール型(ハンドボール)の授業である。授業の概要は以下の通りである。

- ・小学生4人対選手2人で対戦するゲーム
- ・1ゲーム2分、小学生チームは次々に交代し選手と対戦する
- ・小学生が守るゴールサイズは選手側よりも小さく、ボールはソフトハンドボール1号球を使用する

一般に、実業団選手が子どもに技術講習を行う社会貢献活動は多くのチームが行っている。これに対して本実践は、1つの体育授業として行った。その内容は、子どもも対選手でゲームをすることであり、選手側から子どもに一切指導しないことを条件とした。ただ、このクラスの子どもたちは、ハンドボール単元の既習経験がある。また、子どもたちは単元内で上記条件でのゲームを大学生(教員養成大学の体育科学生)とも行っている。それでも、この単元を通じて教師による技術・戦術指導は一切行わず、ゲームを振り返り子どもが気づいたことを発表することで毎回の授業を終えることになっている。

授業は選手からの自己紹介に始まり、その後すぐにゲームを行った。(図9)



図9 授業の開始 HC名古屋の選手が自己紹介

ゲームが進むにつれて、あるチームでは意図的な攻

撃の隊形が出現した。中でも選手の守備に対して、サイドの位置を占めたり、ポストプレイが発生した。(図10) この授業は教師が戦術を指導するような授業ではないことから、子どもたちが自ら気づいたことと考えられる。

ゲーム終了後は、子どもたちが気づいたことを発表する時間である。その中で以下のような気づきが発表された。(図11)

- ・選手はシュートするときジャンプしている
- ・バウンドパスを巧く使う
- ・パスを捕る人の前に出している
- ・シュートの時もバウンドさせている
- ・バウンドパスの構えから上を通す



図10 左サイドへのシフトとポストプレイの発生



図11 ゲームの振り返りで気づいたことを発表する

次に、教師が選手に対して気づいたことがあるかを尋ね「シュート時にボールの構えを変化させるので、守りづらかった。」と答えた。このことは、普段やり慣れている選手同士と違い、子どもの動きが予測しづらかったのではないかと考えられる。そして、この答えの後、子どもから質問が出た。その対話は次のようになった。

子ども どうしてそんなに強いシュートが打てるの？

選手 いっぱい練習しているから。

子ども どんな食事をしているのですか？

選手 お母さんの元を離れているから家で自分で

作ったもの。

子ども どうしてジャンプシュートするの？

選手 ここから打つより、ジャンプした方がキーパーの位置をずらせるから。

この対話のうち3つめは技術についての質疑応答になっており、選手は実演しながら説明することとなった。(図12)

以上のようにゲーム、発表、質疑で授業は終わった。この実践の越境による「第三の知」の創出はあったのであろうか。一般的に、子どもが選手から学ぶことは



図12 実演しながら説明する選手

あっても、選手が子どもから学ぶことはないと思われる。よく、有名選手が子ども相手のイベントや講習会后、「子どもから元気もらった」などとコメントする。これも広義には「第三の知」と言えなくもないが、「元気」のような情緒的な感想にとどまらず、この実践だからこそ分かった内容に注目する。そのため、選手たちから文書でレポートの提出を依頼した。これを以下に示し、この実践から分かったと解釈できる部分をゴシック体で表し抽出する。

宇野史織選手

今回、愛知教育大学附属小学生4年の体育授業への実践参加をした。担任の方とはHC名古屋として関わりがあり、お互いにとってプラスになるであろうということで呼んで頂いた。HC名古屋としても小学生授業への参加は初めてだったが、小学校授業としても選手を講師としてではなく、児童と共に参加させるという試みは初となるらしく、講習ではなく共に行うという授業がどのような結果をもたらすのかは大変興味深いもので、私が感じたこと、気づいたことは以下である。

まず、実践として行ったものは小学生を4～5人の1チームに分け、HC名古屋の選手を2人で1チームとし、40分間程度、チームを入れ替えながら

の2分ゲームである。ルールとして選手が制限されていたのは小学生の身長より高いパスを出さないこと、ゴールが小学生はネット3面に対し2面であることだ。初めの1サイクルはどの小学生チームもこちらの様子を伺っており、どうすればいいのか戸惑う児童が多く見られた。しかし回数を重ねるごとに私たちの動きを真似しているもの、2人という私たちの人数負けによる有利な場面やコースを捉えてシュートを狙ったり走ったりする者が増え、それに伴い初めはあまり動かなかった児童も積極的に動く児童に連動してボールをもらえる位置、攻撃側からして邪魔な位置に動くようになり、私たち選手も簡単な攻撃ではカット(攻撃側のパスを取るプレー)されることが増加し、しっかり頭を使って判断することが求められた。基本的にバウンドパスを多用していた私たちはだんだんと質が高くなる防御に対して味方同士お互いが良い動き・判断をしないとシュートまでいくことができないという実践と同じよう状況となっていた。事後指導の何に気づいたかを児童が述べる場面では、パスを味方のいる位置ではなく空間に出すことや攻撃側が簡単にパスできない守り方をするなど私たちが基本的に大切にしているプレーが多く発言された。講習していなくても選手の動きを見て、真似て、考えて繰り返し実践を積むことで、教えられるよりも経験として身につけ、何より自分達で考え出すことで授業内での吸収や急成長に繋がること相手側としても実感した。

また、小学生が同じ経験の中でこのように多くのことを感じ考え成長することを間近で見て、私自身も1つの経験の中でどれだけ吸収できるか実践をいかに考えて行うかという重要性を再確認することができ、有意義な時間となったため、機会があれば、また、講習会ではない今回のような形で参加したい。

このレポートでは「選手の動きを見て(中略)・・・自分達で考え出すことで授業内での吸収や急成長に繋がる」「小学生が(中略)・・・成長することを間近で見て、私自身も(中略)・・・実践をいかに考えて行うかという重要性を再確認することができ」と、子どもが主体的に学ぶことに感心し、それが自身の学びの重要性を再確認することになると述べている。このことは、子どもの学びが選手の学びを自覚化させる1つの状況になったのではないかと考えられる。

笠原有紗選手

2018年7月6日金曜日、愛知教育大学附属名古屋小学校4年生の体育の授業に、HC名古屋選手として参加させていただいた。内容は、小学校の授業に私たちが参加する形で、主に小学生対HC名古屋

選手でシュートゲームを行った。小学生4～5名に対し、HC名古屋選手2名、1ゲーム2分で対戦し、ハンディとしてHC名古屋選手はドリブルパスのみ、ゴールは小学生3面HC名古屋選手2面と設定した。ゲームを重ねるごとに、小学生は自分でボールを運ぶことよりも味方を生かす為にパスを出すことを選択したり、大きな壁となってシュートをブロックする選手に対して、股下からシュートを打つなど、様々な工夫が見られた。生徒の成長を感じ徐々にスピードアップしてプレーをすると、「ずるい！そんな勝てない！」といったように、自分の気持ちや悔しさを表現してくれる生徒の姿もみられ、スポーツの醍醐味ともいえる競争の部分の楽しさも感じてもらえたと実感した。シュートゲームの行い方としては、小学生対HC名古屋選手と設定したことで、選手側がシュートを決めても少々盛り上がり欠け、小学生との交流を深めることができなかった。小学生と選手の混合チーム編成にすることで、小学生との交流を望めたり、より近い距離間で小学生に気づきを促す手助けができ、深いコミュニケーションが図れると感じた。

試合後の小学生の感想や質問の発表の場では、予想外に多くの気づきの発表があり、大変驚いた。生徒には特にアドバイスやヒントを与えていないが、選手が意識せずに行ったプレーに関して小学生はよく観察をしていて、「すごかった！」と目を輝かせて発表してくれた。私たちは、人々に夢や希望、感動を与えることを目的とし日々活動を行っているため、このような子供たちの素直な意見や反応がとても嬉しく、選手の立場としても非常にやりがいのある体験となった。

「生涯体育」の学びを目的とした今回の取り組みに参加させていただき、普段私たちが行っている講習会やクリニックとは一味違い、子供たちの学びや経験、そしてスポーツの楽しさを見出す手助けができたと感じる。技術を教えることとは違い、授業を通して自ら学びを得ようとする生徒の姿は、私たち選手の立場としても見習うべきことがたくさんあった。このような取り組みが全国の教育現場で広がり、子供たちがよりスポーツの楽しさを感じて、スポーツ選手が身近な存在になれば嬉しい。

今回はとても貴重な体験をさせていただき、チーム一同大変感謝いたします。この経験を活かし、今度もより一層努力して参ります。ありがとうございました。

このレポートでは今回の実践の在り方への提案がある。それは「小学生と選手の混合チーム」にすれば、「より深いコミュニケーションが図れる」ということ

である。これは小学生と選手が越境することで1つの「実践共同体」になるとも解釈ができる。そして、「全国の教育現場で広がり、子供たちがよりスポーツの楽しさを感じて、スポーツ選手が身近な存在になれば嬉しい。」と、講習会・クリニックとは別の在り方を提案していることがわかる。

高宮 咲選手

私の中で体育の授業の進め方という準備体操から始まり、基礎的な練習で技能を高めてから試合形式に入るというイメージがありました。しかし今回参加させていただいた授業は最初から最後まで試合をまわしていくというものでそのシンプルさに、こんなやり方もあるのかと自分自身新しい発見ができました。

試合を通して生徒たちから感じたことは、決められたルール範囲内でそれぞれのチームが自ら作戦を立てて臨んでいたことです。具体的な例として

- ①とにかく守りに徹して1人の選手に3人マークをつける。
- ② GKを増やしてシュートを阻止する
- ③ 数的有利を生かしてマイボールにした直後遠い位置からシュートを狙う

などこちらからの助言はほとんどしない中で様々な工夫がみられました。その他にも同じチームと2～3回試合を行いました。1回目と2回目で作戦をかえてきたり、他のチームのやり方をみてそれを取り入れたり、単純な2人対4人の中でも何通りもの作戦を生徒たち自ら考案していた点に感心しました。普段チームの活動で行っている講習会ではハンドボールの技術的な能力を高めることがメインとなるため、ある程度細かい部分まで指導して形をつかってから最後に試合で実践してみるという進め方になりがちですが、そのように進めていくとこちら側が正解をあらかじめ教えてしまうことによって、生徒からの発想や工夫が出にくくなってしまいうというデメリットがあります。このような点から考えると、今回行った授業のような進め方を行うことにより自分たちで考えて実行し修正を加えるという作業を繰り返していくことで自然と質が高まっていくこと、あえて教えないという部分にもたくさんの可能性が秘めているということがわかりました。私たちトップアスリートも、コートに立つのは自分たちであり監督が助けてくれるわけではない。最後は自分たちで解決しなければならない。つまり「自分で考えて行動する」ということが常に求められています。それは学生時代から今までずっといわれてきたことであり、今後競技を引退したあとにも生きていくうえで非常に大切な資質であると感じます。その資質を育むためのきつ

けが体育やスポーツの中には数多く転がっているはずですが、今回参加させていただいた授業を通してただ単に技能を高めるということだけにとどまらず、様々な能力を高めることができる体育やスポーツの無限の可能性を感じることができました。今後の自分の活動のヒントにもなった貴重なお時間を与えていただけたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

このレポートでは「私の中で体育の授業の進め方という(中略)・・・こんなやり方もあるのかと自分自身新しい発見ができました。」と、自分のもっていた体育への見方が転換している。また、「正解をあらかじめ教えてしまうことによって、生徒からの発想や工夫が出にくくなってしまうというデメリットがあります。」と、これまでの講習会の在り方を見直すきっかけになっている。そして「様々な能力を高める体育やスポーツの無限の可能性を感じる」ができたことと述べ、体育、講習会、スポーツなどのイメージ転換について語られている。これらのイメージ転換は「自文化の自覚」「異文化占有」の可能性があり、越境的学習の1つの結果として示唆される。

多田菜奈子選手

先日は、小学校の授業にトップチームの選手が参加するという素敵な機会を頂きありがとうございました。今回の授業は、実業団チームやトップチームによくある「選手が小学生に技術指導、一緒にハンドボールを楽しむ」ことではなく、「選手と生徒が実践で勝負をする」という授業でした。これは自分が子どもの頃には体験したことのないものでした。小学生4人、もしくは5人対選手2人、ゴールは小学生が3面、選手が2面、パスは小学生の頭を越さないボールカットができる位置でのパスという少しだけルールを限定した形でゲームを行いました。ゲームの中ではたくさんの作戦・工夫が見られました。

- ①キーパーに2人入り、徹底的に点を入れられない
 - ②4, 5人対2人なので2人は選手にマンツーマンにつき残りの2人は抜かれた人のカバーをする
 - ③マンツーマンにはつかず、エリア際を強く守りシュートを打たせない等の作戦が見られました。
- 授業の最後の今日の授業の感想と選手への質問では、

- ①場面によってパスの種類を使い分けていた
- ②空間に走っている
- ③空間にパスを出している
- ④なんでそんなに上手なの？等

自分で考えないと出来ない質問ばかりでした。技

術指導をしてもらい動きを習得することも大切ですが、技術だけではなくどのようにしたら選手のシュートを止めることができるのか、選手を守れるか、勝てるかということを考えて、小学生同士で意見を出し合い共有して実行することはとても重要だと感じさせて頂きました。今回の授業のねらいの「生涯体育」に繋がっていると思いました。体育・スポーツは、健康の保持増進や体力の向上ばかりでなく、自立心の向上や資質や能力を育てることができると思いますが、健康的な生活習慣を身に付ける、ルールを守る・仲間と協力をするといったスポーツマンシップを学ぶことが出来ます。このような機会は小学生にとってとてもいい機会だと思いました。このような機会が増えると、またこれからの「生涯体育」の取り組みや考えが広がってくるのではないかと思います。

このレポートには「技術だけでなくどのようにしたら(中略)・・・勝てるかということを考えて、小学生同士で意見を出し合い共有すること」の大切さを実感し、それが「生涯体育」やスポーツの目的や意義を再確認することになっている。ここでも、体育、講習会、スポーツのイメージを転換する「異文化占有」が示唆される。

4 選手のレポートから、今回の実践の中に次のような越境的学習の特徴が含まれていると考えられた。

- ・選手が小学生に指導するのではなく、対等な立場でもにゲームを行うこと自体が越境であり、そこに越境した双方が学習する可能性がある。
- ・子どもの主体的学びを目の当たりにしたことで、選手自身がスポーツの学び方やコーチングの在り方などを見直すきっかけになっている。この場合、子どもの学ぶ姿が1つの「状況」になっていると考えることができる。もし、「状況」が単に「ハンドボールのゲームをすること」であるなら、選手は日々そのような経験をしているので、観点の見直しには及ばないものと思われる。
- ・今回の実践が従来行ってきた技術講習会やクリニックを見直すきっかけを与え、これが「新たな社会貢献の在り方」という「第三の知」になった可能性が考えられる。

4. 体育の新たな可能性

今回の2つの実践をふまえ、越境的学習の3つの特徴(2-4項)「実践共同体」「状況」「知の創出」から体育の新たな学習の可能性を考えてみたい。

「実践共同体」の特徴から見れば、学級という単位

はこれに該当しない。しかし、実践の過程にはこの特徴（自発的・非公式的・即興的）を反映させることができる。例えば、跳び箱での取組場所の自由な選択やハンドボールでのゲーム中の自由なプレイ選択が、集団に「実践共同体」の性格をもたらす可能性が考えられる。それは通常の学級でも可能だが、越境者との共同に即興的な態度が求められる点で普段過ごす学級集団とは違うだろう。

「状況」という点でも普通の学級と異なることは言うまでもない。越境者の存在は、教師が単一の学習を計画することを困難にする。そのため、共有課題の模索や学習条件の調整が求められる。そして、このような調整は運動・スポーツを「誰とするか」という関心をもたらす。このことで、従来の体育の関心が運動・スポーツを「どうするか」という技能中心にあった点が転換される。ただ、越境的学習の成果を考える場合、「誰とするか」は単なる交流目的ではない。交流目的を越える「状況」には技能発揮の調整やルールデザインも含まれる。

このような調整・デザインが「知の創出」に至ると考えられる。なぜならそれは教科書にも教師の指導内容にもなく新たに創出されるからである。そして、運動・スポーツに参加する人たちがこのような調整・デザインによって自らの「知の創出」を果たすことがこれからの体育を変えていくものとする。

謝辞

本論文に関する実践にご協力いただいた次の方々に感謝します。

HC 名古屋 角 紘昭様、選手の皆様
 附属名古屋小学校 橋本浩司教諭 井上 歩教諭
 附属名古屋中学校 小池義明教諭
 そして、小中学校の子どもたち

5. 注及び文献

注 1) 「越境学習」との呼び方もある。本稿では、より広範な学習の可能性も考えるため、石山の広義の表現「越境的学習」¹⁾とその定義を使用することとした。

注 2) 本稿で体育とは教科体育をさす。その実践は学校の体育授業になる。

注 3) ヴィゴツキー学派と呼ばれるロシア心理学研究者たちが支持する立場。人の認知的発達とは文化的・歴史的な人工物を媒介とする活動によって成り立つという考え方。

注 4) 断酒を目指すアルコール依存症の人たちの組織。

1) 石山恒貴「越境的学習のメカニズム」福村出版 2018年 pp.19-39

- 2) エンゲストローム著 山住勝広ら訳「拡張による学習－活動理論からのアプローチ」新曜社 1999年
- 3) レイブ, ウェンガー著 佐伯胖訳「状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－」産業図書 1993年
- 4) E, ウェンガー, R, マクダーモットら著 櫻井祐子訳「コミュニティ・オブ・プラクティス－ナレッジ社会の新たな知識形態の実践－」翔泳社 2002年
- 5) 荒木淳子「企業で働く個人のキャリアの確立を促す実践共同体のあり方に関する質的研究」日本教育工学会論文誌 33 (2) 2009年 pp.131-142
- 6) 山口孝治, 和田尚「異校種間異学年合同学習における児童・生徒の意識差に関する研究－ボールルームダンスの学習による年長者と年少者の継続調査からの検討－」日本教科教育学会誌 第29巻1号 2006年 pp.29-38
- 7) 山住勝広「拡張的学習と学校システム開発の介入研究－活動理論的アプローチ－平成17年度～19年度科学研究費補助金研究報告 2007年
- 8) 山住勝広「拡張する学校－協働学習の活動理論－」東京大学出版会 pp.71-97 2017年
- 9) 山住勝広, エンゲストロームら「ノットワーキングー結び合う人間活動の創造へー」新曜社 2008年 p.20
- 10) 上掲書 3) pp.1-12
- 11) 上掲書 3) pp.28-36
- 12) 上掲書 1) pp.26-39
- 13) 香川秀太, 青山征彦編「越境する対話と学び」新曜社 pp.49-50 2015年
- 14) 石山恒貴「企業内外に実践共同体に同時に参加するナレッジ・ブローカー(知識の仲介者) 概念の検討」経営行動科学 Vol.29.No.1 pp.17-33 2016年
- 15) 上掲書 13) pp.22-23
- 16) 上掲書 13) pp.35-64
- 17) 北海道教育大学 HATO プロジェクト報告書「複式学級における学習指導の手引き(改訂版) 2016年
- 18) 石垣市立名蔵中学校「コミュニケーション能力を高める異学年合同体育授業の工夫－学習形態・学習カードの工夫と言語活動を通して(全学年)－」アクセス 2018年9月19日
- 19) 荘川小学校 3・4年合同体育科学学習指導案 2002年

(2018年9月25日受理)